

本シリーズでは2014年12月にJICA筑波国際センター研修業務の一環として実施した、野菜栽培技術関連コースのネパールの帰国研修員の活動視察の結果を報告している。

業務への取り組み姿勢の変化

「本邦研修を通じて、自身の業務に対する取り組み姿勢が変化した」という興味深い意見を得た。具体的には「業務に対して、以前より積極的な姿勢で取り組むことができるようになった」「分からないことがあっても、どう学べばよいかを学んだ」「困難な状況でも何とかしようと考えられるようになった」等である。これらのコメントはアンケートで得られ、インタビューで確認したが、彼らは以前の自分にはなかった、新たな意志を本邦研修で得ることができた実感していた。「技術、知識、経験のほかに、日本での研修は『仕事をする』ということを教えてくれた。それは日本人と同じ時間を過ごしたから得られたことだと思う」という意見は興味深いと共に、日本人として誇らしく思う。

野菜栽培技術研修コースにおける今後の課題

帰国研修員は技術者としてとして、確かな成長が確認されたが、多角的な農家の営農活動に対して的確な助言をする視点はまだ不足していると感じた。年間の収入見込みや価格変動リスクに配慮した作付計画や持続的経営を目指した作付体系は、栽培知識のみならず、農業経済や各農家の営農スタイルに配慮した助言が必要となる。したがって今後の研修カリキュラムには、農家経営の講義の充実やCrop budgetの考え方を実習に取り入れるなど、営農指導能力を強化していくことが必要であると考えられる。

また帰国研修員からは、研修終了後も定期的な知識・技術の更新の機会があると望ましい旨の要望を得た。野菜コースで実施する個別実験・共通実験は社会背景や取扱品目が異なっているにもかかわらず、帰国研修員にとって興味深い内容が多いとのことである。そこで毎年の実験の中から帰国研修員にとって有益と思われる試験結果を抜粋し、ニュースレターのようなかたちで配信したり、誰でもダウンロードしたりできるようなシステムがあると、学ぶ意欲の高い帰国研修員にとって有意義と思われる。同時に、現役研修員の意欲の向上に寄与することが期待される。

まとめ

今回の視察では、本邦研修の効果がある程度確認することが出来たと思われる。第一に、技術研修では、

「現地で今すぐ役立つ技術」に加えて、「将来を見据えた知識技術の習得」が有意義であることが確認された。加えて、活用技術の習得のみならず、本邦研修は「普及員としての能力の向上」や「業務に対する姿勢の変化」といった内面的なところに研修効果を確認できたことは有意義であり、これらは本邦研修において、日本人の仕事に対する取り組み姿勢を目の当たりにしたこと、また自身の個別実験に全力で取り組んだという経験が、彼らの内面に蓄積された結果と思われる。これらの成果は第三国研修では得られにくい、本邦研修ならではの価値であると思われる。

今回の視察では、ほとんどの帰国研修員の配属先が変わっていたことから、上司へのインタビューなど、帰国研修員の本邦研修前後を比較して、研修効果を客観的に評価することが出来なかった。その結果、主観的な意見を集約する形式でのレポートにならざるをえず、得られたコメントは好意的なものに偏った可能性も考えられる。しかしながら、それらを加味しても、これだけの研修員が具体的な事例を挙げて、研修効果を実感していることを確認できたことは、今後の「人づくり」における本邦研修のあり方を考えるうえで有意義であると考えられる。

こういった本邦研修を経験した帰国研修員はJICAプロジェクトや日系企業にとっては、貴重な人材であると思われる。アンケートでは帰国研修員全員が、自身や周囲の人々の日本に対する関心が高まったと感じており、機会さえあれば、日本のプロジェクトや会社事業に積極的に協力したいと答えている。しかしながら実際には帰国研修員がJICAや日系企業と協力体制を組む機会が乏しいというのはもったいない事実である。本邦研修を通じて育った人材を現場で活用することこそ、研修の最大の利益であると考えられる。

そのためには研修を実施するJICA筑波(ときには本部)、在外の現場であるJICA現地事務所、研修を実施する委託会社、そして当事者である研修員の四者が確かなネットワークで繋がっていくことが重要であると考えられる。

